

美術教育システムを形成する東西美術造形観比較研究と宮島における文化的地域貢献

報告：吉井章（代表）、三原捷宏、友安一成、笹井孝太



研究目的

本学（研究代表者：吉井章・研究分担者：三原捷宏・研究分担者：友安一成・協力研究員：笹井孝太）研究プロジェクトは、宮島の活性と保存を目指した地元支援を含めた文化的な活動を展開すべく計画された。文化的活動内容はその基本構想に、美術高等教育システム研究における東西美術造形観比較における観点から、日本造形と西洋美術造形（油絵等）のコラボレーションをテーマに公開実験制作と展示発表を通年で展開すること。また、その理論的背景を研究するために、宮島において研究会を開催し研究課題について検証を行うことを目的とした。また、宮島の伝統文化の膝元で、日本美を守り維持をしてきた古くからの町屋の保存や保全に協力し、これら一連の活動によって、宮島の新たな認識と評価をもたらせる総合的協力による地域貢献に寄与することを特色とするものであった。

研究内容

平成17年度、本研究のプロジェクトによる美術造形の実例実験として、油絵・版画等による公開実例実験と展示を宮島において行い、研究会を開催した。

① 主要設備について

町屋の研究施設：宮島町大和町 662

E氏邸（無料）、1階（6帖2室と、4.5帖、3帖、2帖各1室）
2階（8帖-1室、6帖-1室）1階 116.8㎡、2階 40.6㎡（建物のみ）→〈公開実例実験と展示及び研究会施設〉

② 研究計画の実施

公開実例実験と展示を基軸に研究概要をインターネット上で公表した。実践的な事例研究をもって発表。

期間：平成17年10月22日-11月21日「Art in 宮島」（作品展示とアトリエ制作公開現場）

経過報告

上記研究施設の準備とその経過

平成17年6月18日（土）E邸荷物を一カ所に纏め大掃除、平成17年7月4日（月）改装工事開始。壁面1・2階室内の塗装、2階ベニヤ板床張り、電気工事。平成17年8月21日（日）-22日第2次材料持ち込み工事終了平成17年8月29日（月）公開実例実験と展示の公開について、DM内容検討

公開実例実験と展示について

研究代表者吉井は、統括したテーマ「—現代芸術と伝統の出会い—」の実例実験作「列柱」シリーズを発表。

研究分担者三原は油絵作品発表。「海景Ⅰ」「海景Ⅱ」各F20号を発表。

研究分担者友安は、鉛筆デッサン「母のためのエスキース」版画「天井の花」「泰山木」「聴音」「牡丹図」「望」を発表。

研究会報告

「東西造形観の相互比較研究」の理論的研究分野では、以下の事項を研究。

- ・ 襖、屏風、障壁画等の平面造形の画題であるテーマやそれらが配置される様式について分析し、造形物と日本の建築との空間関係等を研究した研究ノート発表。

「宮島の町屋の再生とART」について 平成17年10月22日発表

- ・ 他大学の学識者の招聘による研究会を開催。

国際交流の観点を含めてフランス・ルーアン美術学校、フィリップ教授、テーマ「フランス美術の今日」

平成17年11月15日に実施。インターネット（ひろしまインターネット美術館）上に公開。

研究成果及び結果

当初計画のうち、平成17年度分の本研究のプロジェクトによる宮島での美術造形の実例実験として油絵・版画等による公開実

例実験と展示、及び研究会を開催することが出来て、宮島における研究スペースを確保できたことは、成果と云えるであろう。2年以上の空き家であった施設の破損補修や内装のリフォームには個人資金援助投入と、施設設備へはボランティアの方々に大掃除をしていただくなど、年度内の10月に研究展示のオープンできたことは、本研究の大きな手がかりとなった。今後の研究施設での成果の常時発表と、インターネット上での広範囲な成果発表も期待するところであった。

研究施設と状況報告

町屋の研究施設：宮島町大和町662は宮島の町屋通りに平行してまだ旧家の面影を残す古い通りに面している。いずれ、地元でも町おこしを予定している通りでもある。E氏邸の連なった部屋は昔の町屋建築のスタイルを残す。極力現状を保存させるとともに、研究課題を発表する場として確保する事が望ましい。

研究の実施と研究評価

平成17年10月22日-11月21日「Art in 宮島」(作品展示とアトリエ制作公開現場)は、町屋通りの裏通りであるが公開時期として、秋の観光シーズンであったため、多くの観客が訪れて、さまざまな成果が得られた。また、本学油絵専攻学生の授業関係(構成実習Ⅰ-Ⅲ)のサテライト・キャンパスのスペースとして活用された。

研究による今後

本研究プロジェクトは平成17年度をもって、ひとまず解散することとなったが、本学卒業生等によるアーティスト・イン・レジデンスの形を維持し多方面で地域貢献の一翼を担いつつ、研究を継続しながら新たな展開を模索中である。

平成17年10月22日-11月21日「Art in 宮島」公開展示 「海景Ⅰ」「海景Ⅱ」2005年作

三原捷宏

海景をモチーフとして描き始めてから、いつの間にか40数年になる。はじめ頃は、瀬戸内海の自然と人間との接点を表現の対象としていたが、ここ10年余りは、海そのものがモチーフとなり、海水の動きや波の形の変化による色と形の組み合わせに興味の中心が移ってきています。

自然が作り出す曲線的な形状と色彩の変化による組み合わせによって創り出される、美的構成と、自己の内面における東洋的美意識の重なりあう世界を探し求めている現在である。

宮島の神社の持つ直線的構成による東洋的精神の美的空間の中にあって、自己の美意識の再確認を試みた二つの作品の発表でした。



上.《海景Ⅰ》 下.《海景Ⅱ》

アート・イン 宮島

平成 17 年度特定研究「宮島の町屋の再生と ART」について

吉井 章

宮島の「町屋」は、厳島神社の膝元で、日本の古き良き生活文化を今に伝える建物である。よく知られるように「町屋」は、通りや路地に面して、狭い間口で奥に長く続く建築様式が一般的であり、日本の昔からの街道筋の宿場等の人口密集地にみられる集合住宅の形式である。

日本の一般民衆の建物は、大きく分けて一戸建ての「民家」に見られるような、大黒柱を中心とした大きな間取りのある空間をもつ建物と「町屋」のような隣家と壁を接して地形に沿って小さく区割りされた部屋空間をもった建物の形式がある。「町屋」は、入り口の玄関、仕事や来客対応のための間や日常的な生活の間を分断する中庭（光取りと生活行動の仕分けを兼ねた）が設けられているのが、そのスタイルである。とりわけ中庭の小空間は、光取りと云った日常の生活のために建築物の中に配置されているだけでなく、非日常的な情趣を展開できるような坪庭が設えられている。それは、住む人々にとって、ある意味での心の置き所の小宇宙になり得る場所であるかもしれない。

さて、油絵専門であるプロジェクト・チームが敢えて、町屋を舞台にした、「町屋の再生と ART」（建物の保存と修復や人々との交流、実験的な展示）の特定研究に取り組むにあたっての前提となる事柄について述べたい。

日本の美意識と西洋感覚

1. 日本家屋は、室内空間そのものが美意識を感じさせる場であり得るかもしれない。木の柱と土壁等は、日本の風土の中で得られる様々な素材の組み合わせを、必要に応じて改良しつつ創り出したものであり、「尺」を基にしてバランスのとれた比例に無駄のない空間へ淘汰させた、その美しさがあるのではないだろうか。

一方、地震の少ない西洋建築では、石材を基にした構造で時代のニーズに沿った様式を創出した。基本的には、石柱が構造体（リブ構造）か、あるいは石壁が構造体の建物が主流である。いずれも室内空間の高さにゆとりを持たせた建物が一般的で、日本建築と大きく異なる点である。そのため、外観の美的な配慮に対して室内空間は、どちらかと云うと副次的に配置される家具や装飾物によって変化をする、いわば住み手の感性が問われるものでもあるかもしれない。

2. 実験展示を行うにあたって、その器である建物「日本造形空間の町家」で西洋造形の「油絵」の展示は、この環境や空間の全てについて解釈する姿勢も問われるものであろう。その意味で、よく知られている、幕末・明治初期に流入した「油絵」の受容した歴史的なリピートをここで繰り返すのではなく、現代における作家の姿勢を提案する事にあると思う。

3. 1. で述べたように「町屋」の室内空間はそれだけで美的な空間といえる。この室内に展示を行う事は、作家のコンセプトがまず問われる事となるが、3 年間計画の初年度に幸いにも着目すべき研究テーマに出会う事が出来た。



本研究の企画がスタートした頃、この「町屋」の玄関を入った正面の丸窓の下半分は崩れてその原形を留めていなかった。ここで、本来ならば「再生」と言う課題から以前のような形に修復すべきところだが、崩れた形の窓を見ている内に、ヒントになる構想が浮かびあがった。美術における形の基本は、○・△・□であると思う。とりわけ、○の形は、象徴的で非常に完結した視覚的に強い形であり、そのため東西に共通して建築物に意図的に用いられる代表的な形であるといえる。この○から連想する、例えばアーチ形は、日本的と言うよりも西洋的な要素（アーチ形は絵画・彫刻などに利用された）がより多く意識されるものであり、実験的な試みをする手掛かりとして具体的な形と考えるのである。ここにアーチ形の発想（西洋的な）をこの日本造形空間の場に持ち込む事ができないだろうかと言う点について着目したのである。そこで、崩れた状態に若干の手を加え、アーチ形に修繕を行い研究課題の具体的な提案にする事とした。このアーチ形を媒体とする「東西美術造形観比較」の実験材料として、今後にも展開する予定である。

作例について

1. 題名「柱頭」サイズ 600 × 910mm（上部円形アーチ型）素材：パネル、下地ドライフレスコ。描画材料：アクリル絵具【参考資料：イタリア、ペルージャ美術学校（Giovanni SANTINI “Scuola e Architettura” Accademia di Belle Arti di Perugia）資料より】
- 2 題名「列柱Ⅰ－Ⅶ」各サイズ 580 × 1600mm 素材：パネル、下地アクリルジェッソ。描画材料：アクリル絵具



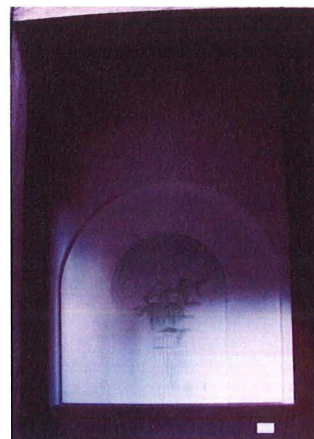
平成 17 年度研究キーワード：「町屋」、「民家」、木の柱と土壁、墨彩（水墨）、油絵、比例（プロポーション）、アーチ形

当初 3 年間の予定項目

平成 17 年度：東西美術造形観比較（日本的な伝統技法を参考に実験制作。対比的に展示）

平成 18 年度：町屋の室内空間と「見立て」（油絵による制作）

平成 19 年度：町屋と造形活動（平面造形の可能性について）





1.《母子像のためのエスキース》
2005
鉛筆デッサン
W700 × H1800mm



2.《潮音》
2005
銅版画、ハードグラウンドチッピング、リフトグラントエッチング
W850 × H720mm



3.《泰山木図》
2003
銅版画、ハードグラウンドチッピング、リフトグラントエッチング
W900 × H720mm

友安一成

宮島は厳島神社社殿を中心とする歴史文化遺産と、それを支える住宅地域とによる濃密で不思議な景観と空間を持つ。本研究はこの宮島に於いて、美術教育における西洋と日本の造形観の比較の研究と、宮島の住宅地域の町家における文化的な地域貢献を軸にして、油絵の公開実例実験及び研究会、作品展示等多様な内容が用意されていた。

研究分担者として主として、作品展示とアトリエ公開制作を内容とした「Art in 宮島」において、デッサンと銅版画の展示に参加するかたちで関わった。この特殊な建築様式の庭を取り巻く壁、階段の壁などに鉛筆デッサン「母子像のためのエスキース」、銅版画「潮音」、「泰山木図」等を展示した。

この発表展示においては、空間的事実として町家という性格づけされた居住空間が先に用意されており、その日本的な構造、機能、造形の考察、町家を場として作品展示をする時の表現の構造の考察等、多様な関わりの方法が考えられ、協力研究者として自らの関わりを問われることになった。

現代の版表現の方法論は、従来の平面から空間的な場を持ち込む制作まで多様な展開をみせている。私自身は版による平面の制作を行っている。この町家という極めて日本的な特殊な要素を持つ空間に、そうした場に対して新たな解釈とそれによる方法で

関わるが必要と思われたが、その概念の組み立てと具体的な方法の模索を進めるなかで、結果として私の日頃からの制作の考え方から異なる方法で進めるのではなく、町家という建築の様式が提供するこの空間に、日頃の平面の版画作品の展示という形になった。この方法は、場に関する積極的な意味は見いだすことは出来なかったが、脈絡を持たず町家という特殊な場と平面作品が共有する空間は、実空間としてたち現れて、そこに同化するもの・異化するもの・生成するものがそれぞれに立ち現れてくる。その中に表現の構造の考察を進める興味あるモチーフが見いだせると考えた。

そうして本研究のいくつかのテーマに対して、具体的にこの建築様式が持つ平面としての壁と襖、その空間の考察と、その平面の版表現の作品を持ち込むことの考察を進めていながら、やはり基本的な平面絵画の造形の解釈の違い、その背景としての東西の造形観の考察へと進んだ。

もとより版表現は洋の東西の造形観の違いは少ないと考えられるが、改めて歴史的、多様な版表現それぞれの造形的な解釈の考察へと収斂していくことになった。



光明院コラボレーション



トヨタ・ネッツ・ギャラリー

—「Art in 宮島」(作品展示とアトリエ制作公開現場)を通して—

笹井孝太 (広島市立大学協力研究員)

平成 17 年 6 月より、宮島島内の E 氏邸を研究グループが借受て、研究協力者として住み込みながら大掃除、改装工事などを 2 ヶ月余かけて 8 月末に、本格的に研究施設として始動しました。この研究施設では、目的として

1. 作品展示や公開制作を通じた公開スペース
2. 授業の一環を担うサテライトキャンパスの機能
3. 将来的にアート・イン・レジデンスの機能

などを通して活動を行い、これらを通して「宮島」という地域文化に貢献する事がテーマとなりました。目標として掲げていたことについて、一年間でしたが、一応の成果を得る事ができました。

報告

1. について、「Art in 宮島」開催、平成 17 年 10 月 22 日 - 11 月 21 日に行われ町屋通りを一本裏道に入っている本研究施設だが多いの観客の来場がありました。また、その後も公開制作を続行中。

2. について、夏休み期間の構成実習 I - III の実習を手伝い、授業運営の一環を担った。

3. について、平成 17 年 11 月 15 日に研究会(フランスより講師)が開催された。また、広島市立大学学生が様々な機会に訪問。前述の活動は、ひろしまインターネット美術館に随時公開紹介され

た。

以上の活動に平行して個展の開催 (トヨタ・ネッツ・ギャラリー、平成 17 年 12 月 25 日 - 平成 18 年 1 月 27 日) と宮島光明院での音楽 (篠笛奏者: 福原一取、現代琴奏者: 榊記弥栄) とのコラボレーション (テーマ: 花供養) で展覧会を平成 18 年 4 月 8 日に開催しました。これらの活動を通して宮島の若い世代の作家の交流がはじまり現在では、地域貢献の手助けを感じています。

資料

Art in 宮島 公開制作現場 P.20-21

宮島光明院コラボレーション

個展: トヨタ・ネッツ・ギャラリー